

2014/11/09

第 10 回放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会報告要旨

「日本の原子力発電所の住民運動からみた科学・技術と社会の間」

似田貝 香門(nitagai kamon)

東京大学名誉教授 東京大学被災地支援ネットワーク代表幹事)

1) 危機と人類の生存

日本及び世界は人類の生存を脅かす危機が迫っている。

「リーマンショック」(2008 年)に端を発する「金融危機」(100 年に一度)や、経済危機、核の危機、気候変動など、地球の危機を真剣に考え、管理しなければならない問題を抱えている。それらの問題は、人類の生存そのものがかかってくる。

そして、阪神・淡路大震災(1995)から、中越沖、東日本大震災(2011 年 1000 年に一度)へと続く自然災害。とりわけ、原子力発電所等をめぐる問題は、極めて大きな爪痕を残した。

2) 生き残るためのテーマ；生命、自立、共生

これらによって、生活の場たる市民社会、地域社会の脆弱性＝危機を一層深めた。このような状況の中で、社会科学のマクロなテーマは、生命、環境、情報、自立、共生といった軸からなる。とりわけ基礎的な問題としては、生命(いのち)、自立、共生(支えあい、わかちあい)である。

3) 危機回避の「救済論」としての《科学・技術》という考え方

危機に対応し、科学・技術を中心とした「持続的可能性」(サステイナビリティ)という考え方がこの十年ぐらい、社会にも定着している。この「持続的可能性」という概念やテーマがあらわれたのは、先ほどの「危機」に根ざしている。

この危機を乗り越えようとして、あるいは回避するプログラムとして、科学・技術の力に期待し、またこの危機を乗り越えるべき市民道徳として、持続的可能性に関する教育が重視される。

社会思想や宗教思想の領域で、こうした対応を捉えると、科学・技術が、人類の「危機」(終末 eschaton)の「救済」プログラムとして現れる(進歩思想)、とみなされる。かつては、危機＝終末 eschaton は、宗教や信仰のテーマであった。それが科学・技術という非神学的、非宗教的領域が、救済 salvation の中心になっている。あらゆる問題が解決可能だと考える価値観。

4) 危機回避の負の連鎖のメカニズム

危機回避＝救済プログラムが別な危機を生み出すという負の連鎖のメカニズムが起きている。あらゆる問題が解決可能だと考える価値観が危機を招いている。その典型が原子力発電所である。

原子力 nuclear energy すなわち原子核の変換や核反応に伴って放出される多量のエネルギー(科学・技術)→そのエネルギーは、化石燃料の燃焼などの化学反応により発生するエネルギーに比べて桁違いに大きい。→兵器や動力源に利用。

*エネルギー不足、化石燃料の有限性、という危機からの回避。

原子力の利用は、放射線、放射線を放出する能力(放射能)を持った物質(放射性物質、放射性廃棄物)を発生。

5) 原子力発電所立地反対運動、反核運動からの問題点

フクシマにみられる問題を、かつて調査研究した東北電力福島発電所立地反対運動と新潟県巻町(現新潟市)の立地反対運動の住民投票から、科学・技術と社会との関わりからどのように考えるか、を以下論ずる。

- ・立地決定(意思決定と責任)、多層化している意思決定決断と責任(この曖昧さ)
- ・事業として決定(手続きと、科学・技術以外の複合的領域による実行組織；立法・行政・電力会社)
住民の意思と議会・首長とのズレ(議会制民主主義および代表性の限界点と住民投票)
- ・科学技術を理解させるという姿勢(説得型；専門知と説明責任)
専門権力の自己 check 機能をさす
- ・科学・技術のリテラシー
読み書きの能力、基礎的な素養。科学技術リテラシーとは科学技術に関する基礎的な素養
- ・合意形成〔論〕(予定調和；理想論と現実 表現と反映 →現実には多様な意見の分布)
科学・技術の実装部分と生活者の間のコミュニケーション構造が成り立っていない

6) 残された課題